

日本語と中国語の 「ほめ」の方法の対照研究

親疎関係に着目して

昂 燕妮

◆要旨

本稿では、日本語と中国語の友人同士・初対面の会話における「ほめ」の方法を、談話分析の手法を用いて分析した。その結果、いずれの会話場面においても、ほめ手は相手の反応を見ながら、評価とともに、事実根拠の陳述、比較、感心や羨望などの感情の表明、価値観の明示など、複数の方法を組み合わせて相手に積極的に働きかける傾向が強かった。

一方、中国語において、ほめ手は評価と同時に多様な「ほめ」の方法を使う傾向が日本語よりやや強かった。また、友人同士の会話では、「ほめ」の材料と方法が初対面会話より豊かである特徴が見られた。

◆キーワード

ほめの方法、日中対照、親疎関係、談話分析

◆ABSTRACT

This article focused on compliment methods during initial encounters or conversations between friends in Chinese and Japanese by using discourse analysis to analyze how these methods are impacted by language, society, as well as close and distant relationships. The results indicated that in all conversation scenarios, the speaker often observed the hearer's response while combining multiple methods such as stating facts and making comparisons to express admiration, envy, and other emotions to express values as a way of positively complimenting the hearer.

On the other hand, speakers of Chinese prefer to evaluate while layering multiple types of compliment methods. Furthermore, during conversations between friends, compliments' content and methods are more enriched than conversations during initial encounters.

◆KEY WORDS

compliment methods, contrastive study of Japanese and Chinese, degree of intimacy, discourse analysis

A Contrastive Study of
Japanese and Chinese
Compliment Methods
Focused on Degree of Intimacy
ANG YANNI

1 はじめに

「ほめ」という言語行動の背後には、当該の社会に基づいた文化的な価値観やルールが複雑に絡み合っている(小玉1993)。接触場面において、話者双方が「ほめ」に関する文化間の相違を十分に把握していない場合、誤解や摩擦を招きやすい。たとえば、ほめたつもりなのに逆に不愉快を招いたり、「ほめ」が相手に伝わらなかったりするようなケースは少なくない。

「ほめ」は相手を心地よくさせる言語行動であるが、ただほめればいいわけではない。相手との人間関係に配慮して、「ほめ」の方法を工夫する必要がある。本研究では、日本語と中国語の「ほめ」がどのように行われ、親疎関係にどのように影響を受けているかを明らかにする。

2 先行研究と本研究の位置づけ

本節では、日中の「ほめ」の方法に関する先行研究を概観し、本研究の課題を提示する。管見の限り、日本語の「ほめ」の方法に初めて着目したのは熊取谷(1989)である。熊取谷(1989)は内省に基づき、「対象物+形容詞」「形容詞+対象物」「対象物+好み」の3つの型が、「ほめ」の表現形式の大半を占めているとした。一方で、それ以降の実証的な研究によって、「ほめ」の方法がより多様であることも報告されている。たとえば、日本語のシナリオにおける「ほめ」に着目した大野(2010)は、「いい、すごい、すばらしい、すてき」のような肯定的評価語を使って「評価」するほか、「事実の指摘」「感情表明」「羨望表明」「意思表明」「感謝の表明」「祝賀・挨拶・決まり文句」「非言語表現」を用いて相手をほめることもできると指摘している。

また、Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論では、「ほめ」は相手との人間関係の距離を縮める言語行動でありながらも、「コメントされたくない」という相手の欲求を侵害するリスクを持っているとしている。ほめることのリスクを解消する方法として、川口・蒲谷・坂本(1996)は、「先生は授業上手ですね」のような「直接ほめ」の代わりに、「大変勉強になりました」のような「間

接ほめ」を提示している。その後、ポライトネス理論の観点から、異なる言語における「ほめ」の方法の特徴に着目した研究がなされた。具体的には、日台のシナリオにおける「ほめ」を調査した葉（2007）、日韓の大学生友人同士の「ほめ」を分析した金（2012）と、日中の会話における「ほめ」を調査した王（2020）がある。これらの研究では、「ほめ」の方法を「直接ほめ・肯定的評価語を使用」、「間接ほめ・肯定的評価語を不使用」、及び「両者の併用」に分けて、対象言語におけるそれぞれのタイプの出現頻度を集計して対照している。その結果、日本語では、相手の領域に入り込まないように配慮しながらほめるのに対して、韓国語や中国語では、「ほめ」を行った理由や自分の意見などを述べることで相手に近づけようとする特徴が指摘された（葉2007,金2012,王2020）。ここでは、本研究と同じく日中の会話における「ほめ」の方法を対照する王（2020）を具体的に見る。王（2020）は「ほめ」の方法を「直接ほめ」（①肯定的評価表現のみ、②肯定的評価表現+情報要求/情報確認、③肯定的評価表現+変化/比較、④肯定的評価表現+具体例/解釈/理由）、「間接ほめ」（⑤感謝、⑥羨望、⑦変化、⑧省略、⑨その他）と「直接ほめと間接ほめの併用」に分類している。中国語において項目③と④が日本語より多く見られたことから、中国語では相手に届くように具体例や理由を述べてほめるのに対して、日本語では相手に負担をかけないように、限られた表現であっさりとはめると結論づけている。

王（2020）の分析は、実際に行われた日中の会話を対象としている点に意義があるが、「ほめ」の方法の分類と頻度の提示にとどまっており、会話例に即した具体的な分析は行われていないため、日中の母語話者がそれぞれいかに「ほめ」の会話を交わしているかが解明されていない。また、話者間の親疎関係が「ほめ」の方法に与える影響に関する先行研究はまだ見当たらない。

さらに、先行研究では、ほめ手が同じ事柄に対して複数回ほめる傾向にあると指摘しているながらも、個々の発話文レベルから分析を行っており、「ほめ」の方法を局所的にしか捉えていない。それに対し、本研究では、「個別の方法の使用」と、同じ事柄に対する複数の発話にまたがる「談話レベルにおける方法の組み合わせ」の2つのレベルから、「ほめ」の方法をより包括的に捉える。

上記に基づき、本研究では、実際に行われた日本語と中国語の友人同士・初対面の会話をデータとして、日中の「ほめ」の方法の特徴、及び親疎関係によ

る影響を明らかにする。具体的な研究課題は以下のように設定する。

RQ1：日中の「ほめ」の方法には、どのような共通点と相違点が見られるか。

RQ2：日中の「ほめ」の方法は、相手との親疎関係に影響されるか。

3 研究方法

3.1 調査概要

本研究では、条件を統制して収集した談話の録音・録画を分析のデータにする。データの収録時期は2020年8月～2021年3月であり、オンライン会議システムZoomを使用して実施し、合計48組の会話を収録した(表1)。完全に自由な会話では「ほめ」が現れにくいため、調査時に、協力者たちに表2の話題を中心に話してもらい、会話を自由に展開してよいと伝えた。

会話収録後、当日中に協力者に一人ずつフォローアップインタビュー(以下、FUI)を行った。FUIでは、協力者に録画を見せ、「自分がほめた」と「相手にほめられた」と思うところで調査者に声をかけるよう頼み、その時感じたこと・考えたことを聞いた。その後、収録したすべてのデータを、「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2019年改訂版」(宇佐美2019)を参考に書き起こした^[註2]。

表1 会話収録の場面設定

条件統制	場面設定		会話データ
言語(日本語母語話者、中国語母語話者) 年齢(20代) 上下関係(同等)	女性同士・初対面 女性同士・友人 ^[註1] 男性同士・初対面 男性同士・友人	各6組	日本語24組 中国語24組 (計960分間)

表2 会話収録の話題

	話題(日本語)	話題(中国語)
友人(親)	①相手に関して良いと思っていること、②相手に関して印象に残っていること、③達成感を感じた瞬間、④今最も実現させたい目標	①欣赏对方的地方、②对方让你印象深刻的事情、③有成就感的时刻、④当下最想达成的目标
初対面(疎)	①簡単な自己紹介、②趣味、好きなこと、③頑張っていたこと、④最近あった良いこと・面白いこと	①简单的自我介绍、②兴趣爱好、喜欢做的事、③努力做过的事情、④最近遇到的趣事、开心事

3.2 「ほめ」の認定と分類

従来の研究では、研究者が言語表現を手がかりに「ほめ」を認定し、各自の定義に合うものを「ほめ」として分類してきた。しかし、「ほめ」は当事者の意識に大きく関わっているため、何が「ほめ」であるかを第三者から客観的に判断するのは難しい（伊藤 2011）。従来の研究では、当事者が「ほめ」として認識していない言語行動を、「ほめ」に分類した可能性がある（張 2014）。そこで、本研究では、言語表現だけでなく、実際の「ほめ」のコミュニケーションにおける当事者の認識も考慮に入れ、ほめ手と受け手双方ともに「ほめである」と認めている言語行動だけを「ほめ」として見なすことにする。

また、本データにおける「ほめ」がどのように行われているかを観察したうえで、大野（2010）の分類方法を修正し（項目④～⑥、⑩～⑭を付け加えて、上位分類を加えた）、「ほめ」の方法を表3のように分類した^[注3]。

表3 「ほめ」の方法の分類

上位分類と定義	下位分類と例文
【評価類】「いい・すごい」などの肯定的な評価を表す表現を用いてほめる。自分の評価を述べる「直接評価」と、他者の評価を引用する「他者の評価」がある。	①直接評価：「○○（相手の姓）君のいいところがね、いいところつったらやっぱ丁寧なところだよ。」
	②他者の評価：我妈就夸你，“你们宿舍这姑娘是谁啊，长得这么洋气”。（母も“あなたと一緒に住んでいる子はおしゃれだね”とほめていたよ。）
【事実類】ほめの根拠・理由となる具体的な事実を述べて相手を高く評価する。客観的な事実・相手に関する事実を述べる「事実指摘」と、自分に関する事実を述べる「情報開示」がある。	③事実指摘：私の立ち位置から見ていて、あっちこっちに知り合いがいるというか、あっちこっちと何かつながりがあるというイメージだったのよね。
	④情報開示：韓国語のサークルをやっていた時に、PPTを作っていただいて、もう今でも、財産になってます、ちゃんと保存してます、パソコンに。
【比較類】「自身との比較」または「他者との比較」を通して、相手を高く評価。	⑤自身との比較：私も別にお菓子作りわりと好きだけども、でも何ていうか、あんなに手の込んだものは作らないからさ。
	⑥他者との比較：「○○（相手の姓）君は、8割の、80%以上の残りの「○（大学の略称）」大生とやっぱ違うなと思う。
【感情類】「感動・好感」「感謝」「感心・羨望」などの感情を表して、相手を高く評価する。	⑦感動・好感：私は「○○（相手の名）」ちゃんのこういうところが好きかも。
	⑧感謝：ありがとう [拍手しながら]、やってくれて。
	⑨感心・羨望：俺はそれすごい尊敬というか、すごいうらやましい。
【基準類】評価の基準となる思考を述べる。	⑩価値観の明示：特別地勤俭节约，我觉得这就是特别好的品质。（勤勉節約ってすごいいい品格だと思うよ。）

【その他】「推測」「興味・関心」「冗談・からかい」「感動詞」など、以上の分類に属さないもの。	⑪推測：[听说对方在做歌手的兼职] 那你唱歌一定很好听，一定是很好听的那种。([相手が歌手のバイトをしていると聞いた後]じゃ、きっと歌が上手ですね、きっとすごく上手だと思います。)
	⑫興味・関心：へえー、面白い、これどんな音が鳴るんですか?。
	⑬からかい・冗談：能坚持每天都跑，跑那么多圈也不累，电动小马达。(毎日根気よくランニングを続けて、何周走っても疲れないし、まるで電動モーターみたいです。)
	⑭感動詞のみ：おっ [少し驚いた様子]。

さらに、本研究では、「ほめ」の対象（ほめの焦点となる物事）から回数を数え、一会話において、同じ対象に関して連続して現れるすべての「ほめ」の発話を一単位と見なし、会話データから「ほめ」を合計180例抽出した（表4）。

4 分析結果

前述したように、本研究では、「ほめ」の「個別の方法の使用」と、同じ事柄に対する「談話レベルにおける方法の組み合わせ」との2つのレベルから分析を行う。本節ではまず、データから抽出した「ほめ」の数を表4に示す。また、個別の「ほめ」の方法の使用頻度の集計結果を表5に示し、さらに、談話レベルにおける「ほめ」の方法の組み合わせの傾向を表6と表7に示す。

表4 各会話場面における「ほめ」の数

場面	「ほめ」の数	場面	「ほめ」の数
日本語・親	58	中国語・親	72
日本語・疎	25	中国語・疎	25
合計	83	合計	97

表4が示すように、日中ともに、初対面会話より、友人同士の会話では「ほめ」が多く現れている。友人間では共有されている情報が多く、すでに親密な関係が構築されているため、「ほめ」の材料がより豊かであり、「ほめ」を行いやすいと言える^[註4]。また、これらの「ほめ」で使用されている方法（下位分類）の頻度と合計数は表5となる。

表5を見ると、各場面における「ほめ」の方法の合計数は、表4で示した「ほめ」の回数を大幅に上回っている。これは、1つの「ほめ」に多数の方法が含まれている場合が多いことを示している。つまり、ほめ手は複数の方法を組み合わせて「ほめ」を行い、積極的に相手に働きかける傾向があると言える。

表5 「ほめ」の方法の使用頻度（下位分類）

方法	日本語・親		日本語・疎		中国語・親		中国語・疎	
	回数	割合	回数	割合	回数	割合	回数	割合
①直接評価	113	52.3%	42	55.3%	122	44.2%	38	50.0%
②他者の評価	0	0.0%	0	0.0%	2	0.7%	0	0.0%
③事実指摘	55	25.5%	9	11.8%	69	25.0%	13	17.1%
④情報開示	7	3.2%	7	9.2%	6	2.2%	4	5.3%
⑤自身との比較	9	4.2%	5	6.6%	30	10.9%	2	2.6%
⑥他者との比較	8	3.7%	0	0.0%	9	3.3%	2	2.6%
⑦感動・好感	5	2.3%	0	0.0%	15	5.4%	1	1.3%
⑧感謝	1	0.5%	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%
⑨感心・羨望	10	4.6%	6	7.9%	9	3.3%	4	5.3%
⑩価値観の明示	2	0.9%	1	1.3%	4	1.4%	4	5.3%
⑪推測	2	0.9%	1	1.3%	0	0.0%	1	1.3%
⑫興味・関心	1	0.5%	5	6.6%	0	0.0%	4	5.3%
⑬からかい・冗談	1	0.5%	0	0.0%	6	2.2%	0	0.0%
⑭感動詞のみ	2	0.9%	0	0.0%	3	1.1%	3	3.9%
合計	216	100%	76	100%	276	100%	76	100%

また、「ほめ」の方法の出現頻度を観察すると、次の3点が明らかになった。

第1に、どの場面でも、「直接評価」が圧倒的に多い。肯定的評価表現を使って評価することは、典型的な「ほめ」の方法であると言える。第2に、親疎の観点から比較すると、「事実指摘」の使用頻度の差が比較的大きい。その理由として、初対面の相手に関する情報把握が少ないことなどが考えられる。第3に、中国語母語話者は友人をほめる時、「自身との比較」を多用している。ここから、中国語では、相手が自分より優れているところが「ほめ」の対象になりやすいと推察される。ほめ手は自分との比較を通して、相手に対する評価を強調して伝えていると考えられる。ただし、自分がへりくだることで相手を高く評価することは、相手にその「ほめ」を打ち消さなければならないと考えさせる可能性があり、親しくない相手にとっては、戸惑いを感じさせる可能性がある。そのため、初対面会話における「自身との比較」の使用は控えられており、これは対人的な配慮であると言えよう。

ここまで、本データに見られる「ほめ」の「個別の方法の使用」について分

析してきた。前述のように、ほめ手は同じ事柄に関して複数の方法を組み合わせさせてほめる傾向がある。そこで、以下では、本研究におけるもう1つの分析の観点である「談話レベルにおける方法の組み合わせ」に目を向け、「ほめ」の方法の上位分類の集計結果を示し、分析を進めていく。

表6 各上位分類の方法を使用した「ほめ」の数と当該場面の「ほめ」の総回数に占める割合

場面と「ほめ」の数	評価類	事実類	比較類	感情類	基準類	その他
日本語・親 58	56 (96.6%)	40 (69.0%)	14 (24.1%)	12 (20.7%)	1 (1.7%)	4 (6.9%)
日本語・疎 25	24 (96.0%)	12 (48.0%)	3 (12.0%)	5 (20.0%)	1 (4.0%)	6 (24.0%)
中国語・親 72	71 (98.6%)	53 (73.6%)	30 (41.7%)	21 (29.2%)	3 (4.2%)	7 (9.7%)
中国語・疎 25	25 (100%)	16 (64.0%)	4 (16.0%)	5 (20.0%)	4 (16.0%)	5 (20.0%)

ここではまず、表6の見方について説明する。たとえば、日本語の友人同士の会話において、「ほめ」が58例観察され、そのうち56例に「評価類」の方法が使われており、全体（58例）の96.6%を占めている。

表6が示すように、全体的な傾向として、ほとんどの「ほめ」に「評価類」の方法が含まれている。それとともに、「事実類」の使用も比較的多く、全体の5～7割程度の「ほめ」に「事実類」の方法が組み合わせられており、根拠となる事実を提示することが「ほめ」を行う上で重要だと考えられる。さらに、前述のように、本研究では、会話参与者双方ともに「ほめである」と認識している言語行動を「ほめ」と捉えている。したがって、評価及びその根拠の提示は、受け手が当該の発話を「ほめ」と認識する重要な手がかりであると言える。

親疎対比の観点から見ると、友人同士の会話における「事実類」と「比較類」の使用が明らかに初対面会話より多い。このことは、表5の分析で述べた「初対面の相手に関する情報把握が少ないこと」と「初対面の相手との比較が、相手の負担になる可能性があること」に関連していると思われる。

なお、日中対照の観点から見ると、初対面でも友人間でも、ほとんどの「ほめ」の上位分類においては中国語の使用率がより高い。中国語では、1つの「ほめ」において多様な方法を使う傾向が日本語よりやや強いと言える。

さらに、場面にかかわらず、「評価類」の使用率が100%にかなり近いことは、ほとんどの「ほめ」が「評価類」または「評価類+他の類型」のパターンで現

われていることを示している。表7はその集計結果である。

表7 「ほめ」の方法のパターンと出現頻度

「ほめ」の方法のパターン	日本語・親		日本語・疎		中国語・親		中国語・疎	
	回数	割合	回数	割合	回数	割合	回数	割合
「評価類」のみ	15	25.9%	7	28.0%	8	11.1%	5	20.0%
「評価類」+他の類型	41	70.7%	17	68.0%	63	87.5%	20	80.0%
「評価類」がない	2	3.4%	1	4.0%	1	1.4%	0	0.0%
合計	58	100%	25	100%	72	100%	25	100%

表7が示すように、日本語では7割程度、また、中国語では8割以上の「ほめ」が「評価類+他の類型」のパターンで現れている。さらに、「評価類+他の類型」の出現頻度を観察すると、日本語より中国語において、また、初対面より友人同士の会話において、ほめ手は「評価類」と同時に多様な方法を使う傾向が強いことが分かった。

上記の集計結果を踏まえ、以下では、「評価類」のみ(例1)、「評価類+他の類型」(例2~例4)、「評価類がない」(例5)の順に、会話における「ほめ」がどのように行われているかを、具体例を用いながら説明していく。

会話例1 〈CMN6〉^[注5]「評価類のみ」の例

番号	話者	発話内容	ほめの方法
7	C23	我是学理科的，等于就是毕业了做的是理科类的工作，辞职之后就是跨学科考的，现在读的是文科，做点国际关系之类的。（もともとは理系の出身で、卒業して理系の仕事をしていただけ、仕事を辞めて文系の大学院に入り、今は国際関係学科の院生です。）	
8	C21	这个，这个真的很厉害啊。（これ、これ本当にすごいですね。）	←直接評価
9	C23	有没有没有<笑>，那你现在做的工作是什么内容呢？。（いいえいえ<笑い>、どんな仕事をなさっているのですか？。）	

例1は男性同士の初対面会話である。C21はC23の自己紹介を聞いた後、8行目で「本当にすごいですね」と「ほめ」を行っている。それに対してC23は、「いいえいえ」と不同意を表してから、「どんな仕事をなさっているのですか？」と、話題をC21の仕事に転換させた。

「評価類のみ」のパターンは、例1のような「直接評価」の一発話だけで「ほめ」が収束したケースがほとんどである。受け手にとって、「ほめ」の根拠や

基準などが明確に述べられていないため、場合によっては、あいづちや社交辞令などと思われやすい。本データにおいて「評価類のみ」のパターンの出現頻度が高くなかったのは、それが一因ではないかと思われる。

会話例2 〈CWF2〉「評価類+事実類」の例

番号	話者	発話内容	ほめの方法
7	C03	然后还有一个优点就是非常地独立。(それに、もう1つの長所は、とても自立的だと思う。)	←直接評価
8	C04	<笑>独立?。(〈笑い〉自立的?。)	
9	C03	对对, 就是那个, 从上大学吧, 你就不跟家里要生活费。(そうそう、なんか、大学生の頃から家から生活費をもらわない。)	←事実指摘
10	C04	不是研究生吗?。(大学院じゃない?)	
11	C03	对对, 研究生, 就不跟家里要生活费, 自己贷款交学费, 我觉得特别好, 特别独立。(そうそう、家族に生活費を求めず、自分でローンを組んで学費を払っていて、本当に素晴らしい、自立的だと思う。)	←事実指摘 ←直接評価
12	C04	嗯<点头、笑>。(うん<笑いながら頷き>。)	

例2の「ほめ」は、「評価類+事実類」の方法によって構成されている。C03は7行目で「とても自立的」とほめているが、受け手のC04は「自立的?」と疑問の態度を示している。それを受けたC03は、9行目と11行目で、「家から生活費をもらわない」「自分でローンを組んで学費を払っていて」と、「自立的」という「ほめ」を行うに至った事実根拠と理由を明確に示しており、12行目でC04が「ほめ」を受け入れた。

例2から次の2点が言える。1つは、C04の「ほめ」に対する応答態度の変化(疑問→受け入れ)から、C03が複数の「ほめ」の方法を用いた効果が見られた。つまり、ほめ手が具体的な事実根拠を述べたことで、「ほめ」が相手に受け入れられたと言える。もう1つは、9行目と11行目の「事実指摘」が産出されたのは、8行目と10行目におけるC04の疑問による応答に関連している。ほめ手がどのように「ほめ」を行うかは、受け手の応答の影響を受けると言える。

会話例3 〈JWF4〉「評価類+事実類+基準類」の例

番号	話者	発話内容	ほめの方法
18	J08	「〇〇 (J07の名)」の正確な感じなのか分からないけど、私、「〇〇 (J07の名)」のいいと思っているのはいつも意外性だね<笑い>。	←直接評価

19	J07	意外性?意外かな、何だろう<笑い>。	
20	J08	なんか小学校の頃、北海道回ったとか(あー)のような経験をしてるかつ、かつ留学したと思うんだけど(うん)、なんかそういうタイプだとは思わなかった。	←事実指摘
21	J07	あ、そうか、なるほど、でもそれうれしいね、何だろう、意外性じゃないけどさ(うん)、若干話の引き出しが多いじゃないけど、私の話聞いててさ、なんか、「〇〇(J08の名)」ちゃんめっちゃ面白いみたいのを言ってくれてめっちゃうれしい(うん)。	
22	J08	私本当になんか、自分の知らない話知っている人とか、していない経験をしている人って、前からたぶんすごいなみたいなセンサーが働くタイプなんだけど。	←価値観の明示
23	J07	ありがとう。	

例3では、「評価類」「事実類」「基準類」の3種類の「ほめ」の方法が使用されている。J08は18行目で「正確な感じなのか分からないけど」と前置きを言いながら相手の「意外性」に関してほめているが、J07は「意外性?意外かな」と疑問を示している。その応答を受けたJ08は、20行目で「小学校の頃、北海道回ったとか」「留学した」と、具体的な事実根拠を追加している。それに対してJ07は、21行目で「意外性じゃないけどさ」と明確に不同意を示している。その後、J08は22行目で再度「ほめ」を行い、「自分の知らない話知っている人とか、していない経験をしている人って、すごいなみたいなセンサーが働く」と、自分の価値観について述べている。続きの23行目で、J07は感謝を表して「ほめ」を受け入れている。このように、例3においては、ほめ手が相手の反応を見ながら、複数の方法を用いて「ほめ」を行っているプロセスが観察された。

会話例4 〈MF1〉「評価類+事実類+比較類+感情類」(ほめ返し:「評価類+事実類」)の例

番号	話者	発話内容	ほめの方法
27	J14	俺毎週の土曜日に絵描いてるのよな、絵描いてインターネットにアップして、コメントもらって。	
28	J13	毎週やってる?すごいな。	←直接評価
29	J14	毎週やってる。	
30	J13	あー、それは一すごいわ<笑い>。	←直接評価
31	J14	あんま反応芳しくない時もあるけど、いい反応もらえると嬉しいな。	
32	J13	なんか、それでも毎週できるってことはすごいな、それ一時の話じゃないけどさ、それ本当に、俺すごいと思う、<継続してやると>{<}。	←直接評価 ←事実指摘
		(中略)	

40	J13	俺はあんま得意じゃないから、(あ)なんか、結構、こういう活動をしている人たちを見て、すごいなって思う、日々思っているから、普通にすごい、(<笑い>) 毎週そういうことやってるの、俺うらやましいな。	←自身との比較 ←直接評価 ←感心・羨望
		(中略)	
46	J13	なんか、そういう人を見て、いや、すごいな、俺にはできないわと思ってるから、「〇〇 (J14の姓)」君は毎週絵をあげてるなんて (<笑い>)、すごすぎるわ。	←自身との比較 ←直接評価 ←事実指摘
47	J14	<笑い> あざーす、「〇 (J13の姓)」君ほめ上手だな、だんだんいい気分になってくる、本当。	←直接評価 (ほめ返し)
48	J13	いやいやいや、<笑い> 本当すごいよ、俺はそれすごい尊敬というか、すごいうらやましい。	←直接評価 ←感心・羨望
		(中略)	
63	J14	<笑い> こう、何だろう、「〇 (J13の姓)」君のイントネーションというか、しゃべり方もそうだし、あのちゃんと筋道立てて、俺はこうだけど、お前はこうだから、そういうところいいなというか、(うん) そういう展開もちゃんと説明してくれるところが、こう、納得させてくれるよね (あー)、俺はほめられるに足る人間なんだという。	←事実指摘 (ほめ返し)

例4は男性友人同士の会話である。J13は28行目と30行目でJ14を「すごい」と2回ほめた後、32行目で「毎週できるってことはすごいな」と、より具体的に「ほめ」を行っている。その後、40行目と46行目で、J13はさらに「俺はあんま得意じゃないから」「俺にはできない」という「自身との比較」と、「すごい尊敬というか、すごいうらやましい」という「感心・羨望」と、「俺すごいと思う」「すごすぎるわ」などの「直接評価」を述べており、多様な方法を使って積極的にJ14をほめている。一連の「ほめ」の発話の効果は、47行目のJ14の応答「だんだんいい気分になってくる、本当」からも読み取れる。

例4でもう1つ注目すべきことは、47行目と63行目に見られた「ほめ返し」であり、相手に対する「ほめ」が相手からの「ほめ」を引き起こす現象が観察された。このような「ほめ」に対する「ほめ返し」は、言葉のプレゼントをくれた相手への返礼として解釈できる(金2012)。さらに、J14の「ほめ返し」の方法には、「直接評価」のほか、具体的な「事実指摘」も見られた。「ほめ上手」をほめるのは抽象的であるが、J14は63行目で相手のイントネーションやしゃべり方を評価し、相手の「ほめ」の仕方がいかに上手であるかを詳しく述べており、「ほめ」を具体化していると言える。

会話例5 〈JMN4〉「評価類がない」の例

番号	話者	発話内容	ほめの方法
23	J18	本当は歌いたかったんですけど、	
24	J20	はい。	
25	J20	歌あんま上手じゃなくて<笑い>、周りにボーカルいっぱいいたんで、じゃボーパやるかってボーパを始めて四年間、	
26	J18	<笑いながら>本当はボーカルやりたかったけど、周りが#####とか?>	
27	J20	<笑い>そういう感じです。	
28	J18	だって、ボーパって急にやるって言われたって…。	
29	J20	そうなんですけど、長い目線で考えたときに、一年やればある程度できるにはなるので、(うん)、そう、歌のうまい人たちの中で一年頑張るよりは、ボーパのほうがいいかなって。	
30	J18	ええ、得意になりますもんね、“何か得意ありますか”って言われたら“ボーパできますよ”、“ええ、やってみて”って言われてその場でできるのがうらやましいなと思って<笑い>。	←感心・羨望
31	J20	そう、この前、懇親会みたいのがあって、オンラインでやったんだけど、その時同じような話になって<笑い>、“ボーパできます”って言ってやりました。	
32	J18	<笑い>って、オンラインボーパしたんですか?。	
33	J20	オンラインでボーパしました。	
34	J18	<笑いながら>オンラインでボーパされたんですか?。	
35	J20	<笑い>絶対みんなそんな伝わっていないと思いますけど、もうなんか、雰囲気だけの感じで、みんな拍手してくれました。	

例5は男性同士の初対面会話である。23～29行目でJ20はボイスパーカッションが特技であることを語っている。30行目でJ18は、得意なことを人の前で披露できるのがうらやましいと、羨望を表して「ほめ」を行っている。その後、J20はオンラインでボイスパーカッションを披露したことを開示し、会話が盛り上がったように見える。

例5の「ほめ」は、「感情類」の方法で表現されており、「評価類がない」のパターンに属している。J18は「うらやましい」の一言ではなく、J20の特技に関してどの部分をうらやましく感じるのかを具体的に語っている。それによって、J20は「ほめられた」と認識したと思われる。

5 まとめと考察

本研究では、日中の友人同士・初対面の会話における「ほめ」の方法について分析を行ってきた。本研究の主な結論は以下のようにまとめられる。

【RQ1】について、日本語と中国語の「ほめ」の方法の共通点として、「ほめ」は「評価類+他の類型」のパターンで現れる傾向が強かった。いずれの会話場面においても、肯定的評価表現を用いて評価することは、最も多用される「ほめ」の方法であるが、ほめ手は評価のみならず、相手の反応を見ながら、事実根拠の陳述、比較、感心や羨望などの感情の表明、価値観の明示など、複数の方法を組み合わせて相手に積極的に働きかける傾向が見られた。

相違点として、中国語において、ほめ手は評価と同時に多様な「ほめ」の方法を使う傾向が日本語より強かった。また、日本語に比べ、中国語では、友人をほめる時、自分と比較することで相手を高く評価する方法が多用されていた。

【RQ2】について、全体的な傾向として、相手との親疎関係にかかわらず、ほめ手は多様な方法を組み合わせて積極的にほめる傾向があった。一方、友人同士の会話では、すでに親密な人間関係が構築されており、相手に関する情報把握も多いため、「ほめ」の材料と方法が初対面会話より豊かであった。

また、具体的な「ほめ」の方法に関して、友人同士の会話に比べ、初対面会話では「事実指摘」の使用が比較的少なかった。なお、中国語母語話者は友人をほめる際に「自身との比較」を多用しているが、初対面会話ではその使用が控えられており、これは対人的な配慮であると考えられる。

以上、本研究から、日中の母語話者は共通して、多様な「ほめ」の方法を組み合わせて相手に積極的に働きかける傾向が見られ、王(2020)が指摘した「具体的にほめる中国語」と「あっさりとはめる日本語」とは異なる結果が示された。先行研究では、研究者が言語表現と各自の「ほめ」の定義を手がかりに「ほめ」を認定しており、その結果、社交辞令のような形式だけの評価も分析対象に含まれていた可能性がある。一方、本研究では、当事者の認識も考慮に入れ、扱う範囲を会話参加者双方ともに「ほめである」と認めている実質的な「ほめ」に絞っている。分析の範囲が先行研究と多少異なるため、結果が異なると考

えられる。

また、本研究から、中国語において、ほめ手は評価と同時に多様な「ほめ」の方法を使う傾向が日本語よりやや強いことが分かった。この点は、王（2020）が指摘した「中国語は日本語よりポジティブ・ポライトネスを好む」「中国語母語話者は日本語母語話者よりバラエティー豊かな表現を用いて積極的に相手をほめる」といった特徴と共通していると言える。

最後に、本研究から得られた日本語教育への示唆について述べる。「いい、すばらしい、すてき」のような肯定的な意味を持つ表現を使って評価することは、最も基本的な「ほめ」の方法であると言える。しかし、本データにおいて、当事者に「ほめである」と認められた言語行動の大半は、「評価類+他の類型」のパターンで現れている。つまり、「いいですね」「すごいですね」のような単純な評価だけでは、受け手にあいづちや社交辞令などと思われる可能性が高い。相手を心地よくさせる「ほめ」を行うには、評価だけでは物足りず、事実根拠や理由の提示、価値判断の基準の明示、関心や感情の伝達などもポイントであり、これは日本語教育現場における「ほめ」に関する指導の重要な側面でもあると言える。さらに、本データにおいて最も多く見られた「ほめ」の方法のパターンである「評価+事実/比較/感情/基準/その他」に基づいて、学習者に「ほめ」の方法のモデルを提示することが可能だと思われる。

上述したように、ほめ手の「ほめ」の方法は、受け手の反応にも関わっている。今後は、相互行為の観点から、ほめ手と受け手の行動がどのように関連しているかを明らかにしたい。また、他言語の母語話者の会話に関しても調査・分析を行い、そこに見られる「ほめ」の方法の特徴を明らかにしたい。

〈名古屋大学大学院生〉

謝辞

本稿は「第13回 日本語/日本語教育研究会」でのポスター発表を加筆修正したものです。本稿の執筆にあたり、多くのご指導を賜った名古屋大学の俵山雄司先生、貴重なコメントをくださった査読者の先生方、学会発表時にご助言をいただいた先生方、及び調査協力者に心より感謝申し上げます。

注

[注1] ……友人同士の会話調査協力者の募集は、日中ともに「親友ペアでの参加」という条件のもとで行った。協力者たちは「お互いが親友である」という認識を持ち、「親しい」から「とても親しい」程度の付き合いだと考えられる。

[注2] ……本稿で使用した主な記号凡例：

”	未完結文	()	短いあいづち	<>	笑いなどの説明
“	引用	<>{<}	重ねられた発話	<>{>}	重ねた発話
?	疑問文	??	半疑問文	#	聞き取り不能な部分
[]	文脈情報	「○()」	協力者の個人情報		

[注3] ……本研究のデータは、Zoomを使用して収録したものであり、会話参加者らの視線やしぐさなどを緻密に記述することができなかった。そのため、本研究では主に「言語行動」を扱い、非言語行動の分析を対象外にする。

[注4] ……初対面と友人同士の会話に現れた「ほめ」の数は、指示した話題の影響を受けられるが、ここで述べている「友人間では「ほめ」の材料が初対面より豊かであり、「ほめ」を行いやすい」ことは、(話題や発話状況などに関わらず)一般的な傾向であると考えられる。

[注5] ……談話表記の規則：J (Japanese) 日本人、C (Chinese) 中国人、W (Woman) 女性、M (Man) 男性、N (New friend) 初対面、F (Friend) 友人

参考文献

- 伊藤由希子 (2011) 「「ほめ」とはどのような言語行動か—コミュニケーション主体の意識に沿ったとらえ直しを目指して」『待遇コミュニケーション研究』8, pp.1-16.
- 宇佐美まゆみ (2019) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2019年改訂版」
- 王欣 (2020) 『日本語と中国語の褒めの言語行動の対照研究—談話展開の観点から』九州大学博士論文
- 大野敬代 (2010) 『日本語談話における「働きかけ」と「わきまえ」の研究—目上に対する「ほめ」と「謙遜」の分析を中心に』早稲田大学博士論文
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵 (1996) 「待遇表現としてのほめ」『日本語学』15(5), pp.13-22.
- 金庚芬 (2012) 『日本語と韓国語のほめに関する対照研究』つひつ書房
- 熊取谷哲夫 (1989) 「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』2, pp.97-108.
- 小玉安恵 (1993) 「ほめ言葉にみる日米の社会文化的価値観—外見のトピックを中心に」『言語文化と日本語教育』6, pp.22-35.
- 張承姫 (2014) 「会話参加者の立場から分析する「ほめ」と「ほめの応答」—会話分析手法を用いた日韓ほめの分析」『言語コミュニケーション文化』11(1), pp.135-148.
- 葉慧君 (2007) 「人間関係からみた「ほめ」の表現について—日本語と中国語のテレビ番組、ドラマや映画シナリオなどの分析から」『外国語学会誌』376, pp.201-210.
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.